

「ただいまー」

玄関のドアを開けると、廊下の奥からドタドタと足音が近づいてくる。大型犬みたいな足音。

「おかえりなさい、映介さん！」

現れた風人は、いつも通り笑顔全開だった。185センチの身体を丸めるようにして俺の鞆を受け取り、コートに手を伸ばしてくる。

「今日、遅かったですね。お疲れさまです」

「あー、うん。会議が長引いてさ」

「じゃあ、すぐご飯にしますか？ それともお風呂先ですか？」

（こいつ、本当に一昔前の嫁みたいだな……。それ  
もできる良妻タイプの）

俺は靴を脱ぎながら、少しだけ口の端が上がりそうになるのを堪える。

同棲を始めて一年。

毎日ツラのいい彼氏が、出迎えに来てくれるというのは悪くない。悪くないどころか、嬉しい。

(可愛いんだよな、こいつ……)

もちろん本人には絶対に言わない。

「飯先で」

「はい！」

即答。返事の速さも音量も、いつだって百点。風人は俺のコートをハンガーにかけながら、後ろから声を弾ませてくる。

「今日は映介さんの好物ですよ！」

「……もしかして、ハンバーグ？」

「はい！ 昨日、食べたいって言ってたので！」

昨日、確かに言った。仕事の帰りに、ふと思い出

したように『そういえば最近ハンバーグ食ってないな』と呟いただけの、独り言みたいな一言。

それを、こいつは聞いていた。聞いていて、覚えていて、材料を買って、今日ちゃんと作ってくれた。

「……別に、ぼやいただけだったんだけど」

「え、あ、迷惑でしたか？」

途端に大きな身体がしゅん、と縮む。耳がついていたら垂れているんじゃないかというレベル。

「いや、迷惑じゃない。むしろ、まあ、嬉しいし…  
…」

「良かったです」

ふにゃっと笑って、凧人は台所へ戻っていく。その背中を見送りながら、俺は溜め息のような、笑いのような、なんとも言えない息を吐いた。

（俺のこと、甘やかしすぎだろ、こいつ……）

そう思うものの、自然と顔がにやけてしまう。

洗面所で手を洗ってから、部屋着に着替える。ハンガーには、俺の部屋着がいつものように綺麗に掛かっていて、その隣に風人のジャージが並んでいる。俺のシャツにかすかに柔軟剤の匂いが移っていて、風人は今日は洗濯もしたのか、と気づく。

（本当、いつやってんだよ、家事）

俺よりずっと早く起きて、俺よりずっと遅くに寝ている気がする。フリーランスの仕事をしていると聞いてはいるけれど、こいつの生活時間は謎だ。

ダイニングに着くと、テーブルにはもう皿が並んでいた。

ふっくら焼き上がったハンバーグの上に、とろりとしたデミグラスソース。付け合わせのニンジンとブロッコリー、コーンまで綺麗に添えられている。野菜はどれも、俺が食べやすい大きさに切り揃えられている。

小鉢にはほうれん草のおひたし。味噌汁は豆腐と

わかめ。全部、俺の好物ばかりで揃えられていて、俺は椅子に座る前に、天井を仰ぎたくなる。

「いただきます……」

「いただきます！」

ハンバーグに箸を入れると、じゅわ、と肉汁が溢れる。一口食べて、思わず声が漏れた。

「……うま」

「本当ですか！ 良かったです！」

向かいで風人の顔がぱっと明るくなる。犬に例えるのはさすがに失礼かとも思うけど、こいつの場合はもう仕方がない。尻尾が見える。

見えないけど見えるのだ。

「玉ねぎ、今日はちょっと多めにしてみたんです。映介さん、甘めのハンバーグ好きって前に言ってたので」

俺は無言でハンバーグをもう一口頬張る。柔らかい。多分、パン粉に牛乳をたっぷり染み込ませたやつ。手間かかってんだろうな、と思うと、なんとなく味噌汁で流し込みたくなる。

「映介さん、ビール出しましょうか」

「ん、頼む」

「はい」

冷蔵庫からきんきんに冷えた缶を持ってきて、俺の右手側にことりと置く。グラスも一緒に。氷入れとくかまでは聞いてこないけど、たぶん次に俺が飲む時には、グラスに氷まで用意されている。

プシュッ、と缶を開けて一口。冷たさが喉を落ちていく。

二口、三口と食べ進めて、俺はふと思い出した。

「あ、そうだ。来週さ」

「はい」

「木曜日、遅くなるから。飯いらない」

「……はい？」

凧人の手が、ほんの少しだけ、止まった。

「会社の後輩と飲みに行くことになってさ。最近入った子の歓迎会っていうか、まあ、そんな感じの」

俺はハンバーグを口に運びながら続ける。

「終電までには帰るけど、飯は向こうで済ませてくるから」

「……はい、わかりました」

箸を動かす音が、少しだけ、静かになった気がした。

「後輩、男の人ですか？」

「ん？ あー、男二人と女一人。三人。俺入れて四人だな」

「女の人もあるんですね」

凧人の声は、いつも通りだった。少しだけ確認するみたいに、穏やかに言っただけ。

「うん。まだ入って一か月くらいの子。営業の部署らしくて、仕事でちょっと関わった程度だけど」

「そうなんですね」

「なんだよ」

「いえ。映介さん、会社ではどんな感じなんだろうって、ちょっと気になっただけです」

にこ、と凧人は笑う。

「その女の人にも、映介さんは普通に優しいんですか？」

「優しいっていうか……そりゃ後輩なんだから、仕事は教えるだろ」

「飲み会でも？」

「は？」

「映介さん、困っている人を放っておけないタイプだから、女の人にも優しいんだろうなって」